

2. 多雪地域におけるニホンザルの適応
3. 行動
4. 第6回ミニゼーション研究会
5. ニホンザル地域個体群の研究の従来の成果のまとめと今後の進め方
6. 生殖とリズム
7. 脳と行動

8. ロコモーション・ワーキンググループ研究会
9. 霊長類のタンパク質の構造・機能・進化

これらの共同研究課題，研究会に使用された費用は研究員等旅費 689.5 万円，校費 303 万円であった。円滑な共同利用研究活動の発展のためには大幅な増額が望まれる。
(久保田 鏡)

2. 研究成果

設定課題 1. ニホンザル地域個体群の研究

「ニホンザルの群れ社会におけるおとなのオスの社会的役割」

○ 川中 健二 (信州大・医¹⁾)

ニホンザルの社会構造については，その研究の初期に「群れの同心円的二重構造」とか「クラス」といった概念が提出されているが，その後はこれらの概念はあまり再検討されることなく用いられたり，あるいはあまりはっきりとした論拠を提示することなく否定されたりしている。

ニホンザルの社会について，これらの概念が提出された当時の知見と，現在のそれとの間の最大の相違は，おとなのオスの去就に関するものであろう。ニホンザルの群れには常に複数のおとなのオスが所属しているのは変りない事実である。しかし初期にはそれらのオスが群を離脱したり新たに加入するといった現象はほとんど観察されず，したがってそれは考慮に入れられていなかったのだが，現在ではこれらの現象について多量の資料が収集され，同一の群れに所属しているおとなのオスたちでもその出自は多様であることが知られている。したがって初期に提出された概念に再検討を加えるためには，これらのおとなのオスたちの群れの中での地位や，社会的役割などを明らかにする必要がある。

こういう目的のもとに 10 年以上にわたって餌づけされ，餌れの中で生まれたものも，他から加入したものもすべて完全に個体識別されている志賀高原 A 群を対象として，夏と冬の各 1 回調査を実施した。各期間には，地獄谷野猿公苑の概念図を用意して，毎日 1～1.5 時間ごとに餌さ場とその周辺で見える限り全部の個体をそれに記入し，またその間に各個体間の交渉の様子を記録した。その結果は多くの点で夏期と冬期とは異なっているので，その変化の意味づけを確かなものにするために，51 年度も引き続いて同じ群れを対象に同様の調査を

おこない，その結果も合せて考察したいと思っている。

上信越山岳地域のニホンザル個体群

○ 好広 真一 (京大・理)

常田 英士 (地獄谷野猿公苑)

汕田よし子 (志賀高原自然史研究会)

ニホンザルの生息域は，主として人間の活動により，また一部は地理的条件によって，様々の程度に分断されている。群れの行き来がないほどに他と分断されたニホンザル個体群の 1 つとして，上信越下岩山系にすむものをとりあげて，森下 (1961) の個体群のとらえ方をあてはめてみると，次の 3 つの段階が設定できる。

1. この地域にすむ個体の全体——大地域の個体群：信濃川，関東平野，白河・郡山盆地，阿賀野川，猪苗代湖で囲まれる。水系としては信濃川水系，阿賀野川水系，利根川水系，那珂川水系，阿武隈川水系に属す，広さ約 20,000km² の地域にすむ全個体を含む。

2. 各水系の支流域にすむ個体の全体——小地域の個体群：信濃川水系ならば，横湯川，角間川，松川といった支流域の，広さ 10—80km² の地域にすむ全個体を含む。

3. 群れ

大地域個体群を小地域個体群に分けることの妥当性は，次の点による。(1)この大地域の標高 800m 以下は自然林がほとんどなく，1,700m 以上は針葉樹林帯で，2 つの小地域は，少なくとも一部は，利用されることの少ない針葉樹林帯でへだてられている。(2)ニホンザルは川の近くを採食や泊りによく利用する（とくに初冬から初春にかけては顕著である）。(3)最も集中的な調査の行われてきた小地域である横湯川流域には，1970 年以降，A，B₂，C の 3 群が生息しつづけ，これら以外の群れが観察されたのは 1 度しかない。

これら各段階の個体群において構造（分布，個体数など）と機能（接触，交流など）を取り扱った上で，他の大地域個体群との比較を行うことが，ニホンザルの寒冷

1) 現在の所属：岡山理科大学

700 岡山市理大町 1—1